同和問題シリーズ 325

自分を語ることの大切さと、安心を実感

～受けとめてくれる仲間がいたから～

いのち・愛・人権

自己変革 ～仲間とのつながりで～

九月二十二日、第七期鳥取市解放大学（〇三～〇四）の生徒五二名が卒業を迎えました。

昨年度は、「反差別・人権～私の生き方～」を、今年度は、「人権のまちづくり」をテーマに学びました。そして、卒業レポート「人権のまちづくり～私の提言～」にまとめました。

この二カ年の研修では、差別の現実を知らなかった自分に気づき、改めて、どうすれば差別をなくす側に立つ生き方ができるのか、自分にできることはなにか、を仲間と議論しながら問い続けてきたことと思います。そして、多くのものを得たようです。

〝自分を語ることは苦しいけれど、安心感があった。〟

グループに別れ、議論する生徒のみなさん

この卒業生の言葉は、反差別・人権の同じ目標をもつ仲間とのつながりのなかで、自分らしく生きられるということを意味しています。差別のからくりを知り、取り組みによってなくせるという展望をもち、仲間がいるからできるという勇気と希望を得た自己変革の過程を歩み始めたようです。卒業レポートからも、自分の住む鳥取を人権のまちにしたいという熱い思いが伺えます。

～卒業生からの主な提言～

『鳥取市には人権に関する資料館がない。解放大学生の総意で求めていきたい』、『公民館に人権センター的機能を置き、人権相談システムをつくる』、『解放大学の充実と卒業生の活用をはかり、人権教育・啓発を推進していく』、『市民と行政との協働でユニバーサル・デザインを基にした住みやすいまちづくりを』

卒業生へのメッセージ

卒業生たちには、これらの提言の実現をめざした取り組みが、人権のまちづくりそのものであることを忘れず、地域や職場での実践を期待します。反差別・人権の取り組みは、解放大学の場で終わりではありません。人権は伸展していくものです。つながりを大事にして共に歩む仲間でいて欲しいものです。

新たな出会いを

さて、いよいよ新鳥取市のスタートです。来年の解放大学は、第八期（〇五～〇六）を迎えます。人権尊重都市の実現に寄与するため、「出会い、発見、新たな自分づくり」ができるよう、体系的で充実した内容にしたいと思います。

どうぞ、みなさん、反差別・人権の社会づくりをめざして、また、新たな出会いを求めて、解放大学にご参加ください。

㈶鳥取市人権情報センター（☎24－3125）

卒業は、終わりではなく始まりだ

５年前からの念願だった解放大学を受講できたことを嬉しく思います。しかし、過去の私のように受講したくともできない人が沢山いることを忘れてはならないと思います。

解放大学で学んだことは、たくさんの講師の方との出会いから、一つの言葉の裏にある背景に気づくことです。フィールドワークでは、改めて差別の現実や取り組みを自分の体験で知ることの大切さに気づきました。

そして、グループ討議では、常に自分が問われました。自分を語ることの難しさ、不安、苦しさ、しかし、語ることがどんなに大切で、安心感をもたらすかということを実感しました。受けとめてくれる仲間がいたからです。

つながりの素晴らしさ、運動することの素晴らしさを忘れず、第７期生全員で、共に新しい一歩を踏みだしていきましょう。

（卒業生のレポートから）